

テーマ：「木」

設定の理由：園では従来より木の玩具での遊びを取り入れてきている。園舎も木のぬくもりを感じられる設え、園庭にもたくさんの木が植えられている。子どもたちが身近に感じている「木」に焦点を当てて、生活や遊びの中で木の柔らかい感触、ぬくもり、音、温かみを十分に味わい豊かな情操を育む。また「見立てる・並べる・積む・構成する・作る」など、自然物の木や木製玩具を通して、遊びを自ら工夫し発展させていく力を育む。

活動1-1：「独歩の森にいてみよう！」 0歳児クラス（9名）

活動内容：独歩の森に向かう。初めて向かった時、（11月20日）、2回目に向かった時（12月3日）の様子を観察し、その目線の先や発見、興味を捉え記録していく。

活動のねらい

木や枝、落ち葉等に興味を持って、触れたり見たりして感じてみる

用意した環境

独歩の森（園の近くにある公園。木が多く、落ち葉やどんぐりが多くある。）

子どもたちの姿・子ども同士や保育者との関わり

・歩いているときに落ち葉を踏むと、踏んだ足を戻して足元を見ながらもう一度踏みしめていた。「くしゃって音がしたね」と担任が声をかけると、担任と目を合わせてにっこり笑う。その後何度も力強く足踏みしていた。

・普段から枝が好きな子は、枝を見つけると嬉しそうに担任に見せに来る。新たな枝を見つけたので拾おうとしたところなかなか取れず、（細い木の根だった）不思議そうに眉間にしわを寄せていた。

・担任が落ち葉を持って上から落としてみせると、真似をしようとする。その友達の様子を見てさらに真似をしようとする姿もあった。

・どんぐりを見つけると担任に嬉しそうに見せにきて担任の手のひらに集める。落ち葉の下にどんぐりを見つけると、「ここにあるんだ」というように手で落ち葉をかき分けてどんぐりを探していた。



・落ち葉を拾ってはワゴンに入れる。「素敵なもの見つけたね」と声をかけると嬉しそうに笑って見せる。その後探索をしている中で穴の空いている切り株を見つけると、その中に見つけた落ち葉やどんぐり、枝などを次々に入れる。しばらくすると担任の服を引っ張り、切り株を指差し連れていく。切り株について担任から「いいものあつめたんだね」等声をかけられると満足そうに笑う。その後、別の担任のそばに行き、同じように呼びに向かっていた。

・風が吹くと上を見上げて目を見開き口を開けじっと眺める。じっと見ていた。その後ワゴンに乗って帰る際にも風が吹くと、落ちてくる落ち葉に向けて「ばいばい！」と手を振る。

保育者の振り返りと気づき

意欲的に探索活動をする様子がとても多く見られた。園庭では見られない木の揺れる様子やどんぐりやたくさんの落ち葉、大きな枝等には特に興味を持っている様子だった。担任や他児と一緒に触れたり観察する中でだんだんと興味が増し、たくさん持ってみたり集めたりという様子が増えていった。そんな子どもたちの様子から、木に囲まれた環境は魅力的なことが分かる。

なんだろう、不思議だな、すごいな…という発見の場面、夢中で探したり試したりしている場面では、じっくりと見て触れて、五感をフル回転させているようだった。見終わると見つけたものを担任まで持ってきて見せたり、できたことを見せたりすることも多い。発見や嬉しいことを担任と共有したい、と思ってくれているのだろうか。この場面で共感し嬉しさを分かち合うことを大切にしていって。

こうやって実際に触れて感じたこと、気が付いたことが、「またやってみたい」「次はどうなるんだろう？」といった意欲や興味に、「伝えたいこと」ができることがきっとこれからの発語に繋がっていくのだろう。



活動１－２：「独歩の森で自然と触れ合おう」 １歳児クラス（１５名）

活動内容：独歩の森へ出かけ、子どもと探索活動を楽しむ。木や葉に触れたり、落ち葉集めをし、落ち葉プールを作る。

活動のねらい

子どもたちが身近に感じている「木」や「落ち葉」で遊びながら、感触やにおい、温度や音など五感を使って自然に親しむ。

用意した環境

独歩の森へ散歩に行く。

一緒に落ち葉を集め、落ち葉プールを作るなど遊びのきっかけを保育者が作る。

子どもたちの姿・子ども同士や保育者との関わり

・園庭や散歩先などで砂、石、枝、葉っぱなどたくさんの自然物に触れて遊んでいる姿がある。園外へ散歩に行く機会が多くなり、近くにある農業ふれあい公園や独歩の森などで花、実、落ち葉、どんぐりなど、園内にはないたくさんの自然物に触れることができています。今回は、独歩の森で探索活動を楽しみながら、木や落ち葉に触れ合いながら遊んだ。

独歩の森では、たくさんの落ち葉があり、保育者が集めだすと子どもたちも「いっぱいー！」と一緒に集めている姿があった。集めるときに葉っぱを持つとカサカサという音を楽しむとともに、少しずつ増えてきた葉っぱの山に足を踏み入れて、ふわふわの感触を感じているようだった。「はっぱ、あか、きいろ」と葉の色にも気づいている子もいた。集めた葉っぱの上に保育者が座ってみると同じく子どもたちもうれしそうな表情で、葉っぱの感触を感じていた。また、「ごろーん！」と横に寝そべるようにして、葉っぱを布団のようにしている姿も見られた。しばらく上を見ているなと思うと、上の葉が揺れている様子や隙間から見える空を眺めており、普段はなかなか見られない景色を感じている様子があった。たくさんの葉っぱを持って保育者がシャワーのようにひらひらと落としてみると、子どもたちも手にたくさんの葉っぱを拾い上げ、シャワーのようにしていた。「せーの！」と保育者のいうタイミングでその場にいた子どもで一斉に撒くと一帯が上からの落ち葉でとても楽しそうな姿があった。「もう一回！」と何度も繰り返す行うたびに「わあー！」と歓声をあげていた。

どんぐりや枝もたくさん落ちている独歩の森。葉の下に隠れているどんぐりを見つけると「どんぐりあったー！」と見つけていたり、落ちている枝を持って「おそうじします」と枝をほうきに見立てて落ち葉を掃いたりしている姿があった。普段の生活の中にあるものを実際に自分の遊びとしてイメージを膨らませて実現していた。

また、大きな切り株や丸太などもたくさんあり楽しそうに遊んでいる姿がある。穴の空いた切り株の中に葉っぱを入れてみたり、面の広い切り株をテーブル代わりにして、「いらっしゃいませー」とごっこ遊びの道具として使用し遊んでいた。丸太では、またがって乗り物に見立てて「がたんごとん」と遊んだり、丸太の上に立ってバランスを取りながら渡っていたりする子もいる。

大きな丸太の側面に、なにやら子どもたちが枝を持ちながら集まっている姿があった。「なにかはいってるの」と見つけていたのは、直径３センチくらいの小さな穴。興味津々な子どもたちは中を「あれ？」と枝で突っついてみたり、中を覗いてみたり思い思いに観察していた。「はっぱがはいってるよ！」と気づくと、枝をうまく使って中に入っていた葉を取り出し「はっぱとれたー！」と達成感を感じていた。そこから、もう一度葉っぱを詰めなおして、葉っぱを中から取り出す遊びに変化していった。

保育者の振り返りと気づき

子ども達の発想や気づきに保育者が共感して一緒に楽しんでいくことが大切だった。子ども達が保育者に共感してもらうと、その後に発見した物事を保育者に何度も伝える姿があり、より楽しんでいる姿になったように感じた。共感してもらった喜びが、「いいものあるかな？」“また先生に伝えよう”という意欲につながっていた。また、保育者が落ち葉を集めるなど、遊びのきっかけを作っていくことで、より遊びこむ姿があった。遊びが広がるきっかけを保育者が作っていくことを心がけていきたい。



活動1ー3：「 独歩の森でごっこ遊びをしよう 」2歳児クラス（18名）

活動内容：散歩先(独歩の森)で自然物を使って身近な物に見立てたり、つもりになったりして遊ぶ。

活動のねらい

- ・自然物を使ったごっこ遊びを楽しむ
- ・友だちとイメージを共有して遊ぶ

用意した環境

- ・落ち葉、枝、ドングリなど自然物が豊富な
“独歩の森” に行った

子どもたちの姿・子ども同士や保育者との関わり

芋汁の行事に参加してから、園庭や散歩先で芋汁パーティーごっこを楽しむ姿があった。独歩の森へ散歩に行った際、背の低い木に囲まれている場所を見つけると、「秘密の場所でパーティーしようよ」と言う子がいた。周りの子どももそれに賛同していた。何のパーティーなのか言葉に出してはいなかったが、日頃から楽しんでいる芋汁パーティーだとイメージが共通となりやすく遊びが広がるのではないかと考えた。そこで遊びのきっかけとなるように保育者が近くに落ちていた落ち葉を集め、山を作った。すると、近くにいた子どもが、「火をつけよう」「火をつけたら芋汁パーティーができるね!」と声を出していた。保育者が「芋汁って何が入っていたかな」と声をかけると、具材を思い出しながら「芋汁には芋と、にんじんと、こんにゃくが必要だね」という子や「じゃがいもとさくらんぼもいれよう!」と自分の好きな具材を提案する子どももいた。以前は近くにある葉っぱなどを切り株の穴に入れることを楽しんでいて、今回は具材探しから始まり、落ちていた木の実や、地面を掘って出てきた石などを具材に見立てて料理作りを楽しんでいた。枝は、芋汁をかき混ぜるために使う子どももいれば、具材を採取する際に使う子どももいた。



保育者が木の枝と葉をつなげ、スプーンに見立てられるような物を作ってみた。芋汁ごっこをして遊んでいる子どもが、ヘラのように持ちながら鍋に見立てた切り株をかきまぜ、遊びの中に取り入れていた。また、別の切り株の上で料理を作っている子どもは、保育者が木のスプーンを持っているところを見て、「お魚焼いてるの?」と聞きに来た。枝に刺さった葉が魚のように見えたのだと思い「確かに魚に見えるね。熱いけど食べてみる?」と問いかけた。「うん!…おいしい!」と食べる真似をしていた。

保育者の振り返りと気づき

独歩の森に行き始めた頃は、枝や落ち葉に触れ、ドングリを拾って集めるような遊び方をしていた。毎週3〜4回程、散歩先で遊ぶ経験を重ねていくと、ただ触れるだけではなく、イメージを広げてごっこ遊びの中にも取り入れていくようになった。今回の実践を通して、子どもが日常の中で経験したことを再現するごっこ遊びにおいて、何にでも見立てられる自然物は、自ら工夫し、発展させる力を育むことができる素材だと感じた。「これは〇〇なんだ」「これで△△しようよ」とイメージを共有するために友だちに伝える。何にでも見立てられるからこそ、自分が想像したこと、やりたいことを言語化して相手に伝えようとする力が育つ。友だちの言葉を受けて自分でも想像してみたり「じゃあこんな風にするのはどう?」と展開させようとしたりする。自然物は折ったりちぎったり形を変化させることもできる。変化する素材に触れることで好奇心や探求心が芽生え、遊びの中で自然と非認知能力も育っていくようにこれからも散歩先や園庭など自然物がある環境で遊ぶ機会を大切にしていきたい。



活動2：「 積み木で遊ぼう 」 3歳児クラス（20名）

活動内容：積み木と動物や人型を使って自由に作って遊ぶ

活動日：11月13日 11月26日

活動のねらい

- ・自分の好きなものを自由に構成して遊ぶ楽しさを味わう

用意した環境

- ・保育室にたくさんのレンガ積み木、動物、人型を用意した。
- ・自分のペースで活動に取り組めるよう、広いスペースと十分な時間を確保した。
- ・別のエリアに木製パズルなどを用意し、子どもが選択して遊べる環境を作った。

子どもたちの姿・子ども同士や保育者との関わり

Episode 1

- ・11/13：積み木を積んで高くなってくると、イメージが膨らんできてエレベーター作りが始まる。エレベーターに乗って“東京タワー”の上階に上るようだ。友達がやってきて一緒に積み木を積み、さらに高い建物ができた。近くで“動物園”や“お家”を作って遊んでいた友達が動物を建物に訪問させていた。
- ・11/26：複数の子でエレベーター作りが始まった。子どもからの「キリンを入れるためにはどうしたらいい？」という相談には保育者が一緒に考えてアイデアを出した。エレベーターで東京タワーに上り、動物達が一つ一つの部屋にいるのを見て満足し、動物を動かしてイメージの世界で遊ぶ姿があった。



Episode 2

- ・一人で“お家”を作っていた児は、動物をたくさん使ってひとりで遊んでいた。しかし、隣で他児が“屋根に耳のついたウサギのお家”を作っているのを見て、自分の持っている動物達を訪問させようと動き始めた。そして二人一緒にウサギのお家の前に動物達の行列を作って遊んだ。



保育者の振り返りと気づき

保育者が最初に積み木を積んで作品を作ろうとする姿や友達の作る姿を見て刺激され、積み木を積み始める子もいた。しかし、制作の過程では子ども自身の制作に手や口を挟まずに子どもの自由な発想、思考を大切にするようにした。また、子どもの「こんなときどうしたらいいかな？」と一緒に考えアイデアを出したことで遊びがより広がるのを感じた。積み木を高く積む過程では、指先をコントロールする力や集中力、気持ちをコントロールする力が必要となり促される。また、平面から立体へと変化する中では空間認知能力が上がり、イメージが広がる。上に高く積み、横にも広げて造形することは視覚の発達にも関わってくるだろう。活動を積み重ねる毎にそれまでの経験からイメージが膨らみ、「こんな作りたい」とイメージを持って制作に取り掛かる姿があった。そして何よりも「できた！」という達成感や満足感を味わうことができる活動となったと考える。3歳児では個々のイメージで制作し遊ぶ中、近くで遊ぶ友達との繋がりも見られた。

一緒にイメージを共有し相談しながら遊ぶ姿がある一方、積み木等を独占しようとする児、他児が使う物を使いたい児もいた。トラブルがおこることもある。そのような時に自分の思いを相手に伝えたり、相手の思いに気付いたりといった経験もたくさん見る事ができた。

活動3：「実験！木を水に入れたらどうなるの？」 4歳児クラス（20名）

活動内容：カブトムシが卵を産み幼虫になった時、朽木の消毒について図鑑を見て、「どうして水につけるのか」と子どもが疑問を持っていた。その姿からカブトムシと木の関連性や木への興味を広げさらに深めたいと考え、実際に子どもたちの疑問を実験として、水の入った飼育ケースに木を入れて、変化を観察する。

活動のねらい

- ・木や水の変化に触れ、不思議さに出会う
- ・仮説を立て、友だちと話し合い、協力しながら取り組み、感じたことを共有する
- ・五感を使って体験する

用意した環境 場所：4歳児室

- ・飼育ケース（4グループ分）
- ・水に入れるもの 木（カブトムシ用の木、拾った木、流木）
サツマイモ、ピーマン、松ぼっくり

子どもたちの姿・子ども同士や保育者との関わり

【準備】保育者が様々な種類の木を並べ始めると、触ったり、匂いをかいだり、何かに見立てたりしていた。また、飼育ケースを大人が洗い始めると「洗いたい」と関わろうとする子どももいた。

【仮説】子どもたち一人ひとりが「木を水に入れたらどうなるのか」という仮説を立てるよう投げかけた。1人で考える時間をとると、考えがすぐに浮かぶ子や考え込む子などの姿があった。仮説を立てられた子から、みんなの前で自分が考えた仮説を発表した。考え込んでいた子も、友だちの意見を聞く中で、考えが生まれ、意見を挙げる姿もあった。考えた仮説は「木の色が変わる」「水の色が変わる」「形が変わる」「木が浮かぶ」「木がきれになる」「何も変わらない」というものだった。

【話し合い】仮説をクラスで共有したあと、グループごとにどの木にするか、飼育ケースに入れる水の量はどのくらいにするか話し合いを行った。決まったグループから、飼育ケースに決めた分の水を入れ、自分たちでグループのテーブルに運んだ。木は1本から始めたので、選ぶ話し合いは、時間を要するグループもあった。

【実験】グループごとに選んだ木を水の中に入れて、変化を観察した。選んだ木によって変化に違いがあったので、他のグループの様子を観察しあうと、浮く木と沈む木があることを気づいたり、乾いた木が濡れて色が変わったり、水が濁ったことで水の色が変わったと感じたり、「水に入れるとどうなるか」という仮説と結果を各々感じていた。その後は、用意した木がなくなるまで、実験を続けた。木がなくなったあと、クラスに飾ってあった松ぼっくり、育てたピーマン、5歳児が掘ってきたサツマイモも入れてみることにした。ピーマンは浮き、松ぼっくりは形の変化が見られ、サツマイモは沈んだ様子も見ることができた。

【その後】実験を続けたい子は、続けられる環境を用意した。実験の姿は、木や水の感触を味わう姿に変化していったが、継続して遊んでいるうちに木の皮がはがれ「形が変わった」と気づき、発見をみんなに伝える姿も見られた。途中で歯科検診があると歯科検診ごっこが数名で始まり、遊びの展開が見られた。



保育者の振り返りと気づき

木は日常にあふれている自然物であるが、実験をすることで、より五感を使って観察し、変化や不思議さに触れることができた。昨年からの実験経験が、4歳児になりさらなる探求心につながっている。保育の連続性が、子どもたちの力になっていると感じた。また子どもたちからの疑問や気づきを直接体験してみることで、知的好奇心を刺激する活動となった。子どもからの発信をキャッチすることが大切と改めて感じた。何でもあり、すべて正解の実験が、このクラスらしい雰囲気となっている。また遊びは展開していくことが楽しく、その姿を受け入れ、一緒に大人も楽しむことで、子どもたちの遊びを展開させる力になっていくと感じた。また今回の実験を通して、自分の意見を伝えるとともに友だちの意見に触れることで、よりよいものを生み出し、みんなで1つにしていく経験をした。1人では生み出しきれないこともクラスのみんなとだと生み出せるという気持ちを積んできて、集団として育ってきていると感じる。